16世紀イタリアの植物園にみられる象徴性と審美性について

アゴスティーノ・デル・リッチョ (1541-98) の理想庭園構想に関する研究

THE EMBLEMATIC AND AESTHETIC ASPECTS OF THE ITALIAN
16TH CENTURY BOTANICAL GARDENS

A study on the ideal garden project of Agostino del Riccio (1541-98)

桑木野 幸司*

Koji KUWAKINO

Two of the earliest botanical gardens in the history of western gardens were established at Pisa (1543) and Firenze (1545) by Cosimo I de Medici (1519-74). Dominican friar Agostino del Riccio (1541-98), who served at Medici court, not only recorded the original state of these two scientific gardens, but also used Firenze botanical garden as the model of his ideal pleasure-garden project for a sovereign in his agricultural thesis. By comparing Riccio's record about realized botanical gardens and his ideal garden project, this study argues that early Italian botanical gardens intended for the study of the botanical science also had emblematic and aesthetic aspects.

Keywords: Agostino del Riccio, Firenze botanical garden, Pisa botanical garden, the Medicis, sixteenth century, collection

アゴスティーノ・デル・リッチョ、フィレンツェ植物園、ピサ植物園、メディチ家、16世紀、蒐集

序. コレクション空間としての庭園という視点

西欧の16世紀は、新大陸やアジア諸国との貿易が本格化し、珍奇な物品や新種の動植物が市場に溢れかえった時代として知られる。それは同時に、こうした事物や生物を熱狂的に集めるコレクション活動が、王侯貴族のみならず当時台頭しつつあった新興市民層をも巻き込んで、史上初めての規模で展開した時代でもあった。近年、こうした16世紀人士たちが邸内に営んだ無数のコレクション室を、近代的ミュージアムの起源と位置づける研究が盛んになり、Wunderkammer (独) とも Camera della meraviglia (伊) とも呼ばれたそれら蒐集展示空間の評価が、ほぼ定まりつつある¹⁾。

しかしながら、上記の先行研究群が室内空間のみを分析対象としていたのに対し、屋外空間にも目を向けて見るならば、同様のコレクション活動が同時代の庭園や中庭でも行われていたのではないかと、との予測が成り立つ²⁾。また庭園史の上では、16世紀のイタリアで「植物園」という、植物の蒐集栽培を専門とする特異な庭園類型が史上始めて登場する点が興味深い。近代植物学の発展にともなう当然の帰結と見なされることの多いこの植物園の誕生という現象は、しかしながら、同時代の屋内外におけるコレクション流行との関連も含めた、広い文脈で理解する必要があるのではないかと。

本稿では以上の視点から、16世紀中葉にイタリアで誕生したばかりの植物園が、植物学専門の研究施設という観点からのみでは評価しきれない様々な側面を持ち、また同時代の蒐集趣味に沸く「装飾的庭園」³⁾とも強いつながりがあった点を明らかにしてみたい。

イタリアで世界最初期に建設された植物園の様子を伝える興味深い資料として、フィレンツェの修道士アゴスティーノ・デル・リッチョ (1541-98) が執筆した『実験的農業論』(1595) という著作がある⁴⁾。リッチョは同書の中でフィレンツェ植物園 (1545 年建設) の構成について詳しい記述をし、またピサ植物園の移転作業 (1592 年) についても触れるかたわら、「王の庭園について」と題された章においては、植物園の構成をまねた王侯貴族用の理想庭園を構想している。リッチョのこの理想庭園論を分析することで、科学研究の具たる「植物園」と王侯が娯楽に興じる「装飾的庭園」との関係性を再解釈することが可能と思われる。本稿ではまず、西欧における植物園の誕生を概観した上で、フィレンツェとピサの植物園を分析し、さらに両植物園とリッチョの理想庭園との比較を試みたい。

イタリアで世界最初期に建設された植物園の様子を伝える興味深い資料として、フィレンツェの修道士アゴスティーノ・デル・リッチョ (1541-98) が執筆した『実験的農業論』(1595) という著作がある⁴⁾。リッチョは同書の中でフィレンツェ植物園 (1545 年建設) の構成について詳しい記述をし、またピサ植物園の移転作業 (1592 年) についても触れるかたわら、「王の庭園について」と題された章においては、植物園の構成をまねた王侯貴族用の理想庭園を構想している。リッチョのこの理想庭園論を分析することで、科学研究の具たる「植物園」と王侯が娯楽に興じる「装飾的庭園」との関係性を再解釈することが可能と思われる。本稿ではまず、西欧における植物園の誕生を概観した上で、フィレンツェとピサの植物園を分析し、さらに両植物園とリッチョの理想庭園との比較を試みたい。

1. 近代植物学の発展と植物園の誕生

西欧庭園史上において、植物園らしきものは16世紀以前にもいくつか認めることができる⁵⁾。しかしながら、植物学の専門研究や学生の教育を明確な目的とし、強い公共性を帯びた今日的意味での

* 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻
大学院生・修士(工学)

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Univ. of Tokyo,
M. Eng.

植物園は、16 世紀中葉のイタリアに出現したものが最初とされる。

革新的な研究教育プログラムを備えた近代的植物園の出現には、16 世紀初頭から展開する近代植物学の発展が大きく関与していた⁹⁾。中世までの植物学といえば、薬効研究に重点をおく本草学的なものが主流で、大学のカリキュラムにおいても医学部に従属する分野であった。ところが 15 世紀後半から、古代の博物学や医学の原典テキストが大量に発見され、人文主義者らの綿密な翻訳・校訂作業を受けるにいたって、こうした状況に変化が生じはじめる⁷⁾。

近代植物学の成立過程を精査した K. M. リーズの整理にしたがえば、校訂作業を経てほぼオリジナルに近い手稿が手に入るようになった段階で、それでもなお本文記述と実物の植物との間に矛盾が見つかるようになり、その結果テキスト同士を比較を離れて、実物観察の結果と記述内容とを照合する作業が人々の関心を引いていった⁹⁾。こうして古代文献を、同時代の実地観察データで補足・改訂する作業が 16 世紀初頭からさかんになり、そうした実証的データの積み重ねから、薬効や食用といった有用性の観点を捨象したレベルでの、植物自体の特性に基づく体系的分類の構築を目指す近代植物学が生まれてくることになる。もちろん文献研究の成果ばかりでなく、16 世紀になってから手稿には記載されていない新種の植物が大量にヨーロッパに流入したという事情も、旧来の命名・分類体系の再検討へと人々を導いていったのであった⁹⁾。

こうして 16 世紀中葉に、最新の知見を盛り込んだ革新的な植物学著作の刊行が相次ぎ¹⁰⁾、大学のカリキュラムにおいても独立した植物学講座が開設されるようになると¹¹⁾、世界中から集まる膨大な植物を集中的に管理・研究するとともに、大量の学生を相手に実物観察授業を可能にする「植物園」建設への機運が高まった。世界初の植物園は、メディチ家のコジモ一世(位;フィレンツェ公 1537-69, トスカーナ大公 1569-74)の援助で、1543 年にピサ大学に作られた。続いてパドヴァ(1545 年 7 月)、フィレンツェ(同 12 月)、パヴィア(1558)、ローマ(1563)、ポローニャ(1568)と、イタリア各地の大学で、君主や市政府による植物園建設が相ついだ¹²⁾。世紀の末にはイタリア以外にも、ライプツィヒ(1580)、ハイデルベルク(1593)、モンペリエ(1596)等の植物園が作られている。初期の植物園は一般に、庭園全体を大きく四分分割し、さらに細かな幾何学形態の小花壇と直線的園路によって区画の内部を細分していた¹³⁾。この種の実用性を重視した厳密な幾何学形態が、近代的な植物分類体系の構築に貢献した点がとくに強調されがちであるが¹⁴⁾、果たして合理的な科学精神のみをここに認めてよいのだろうか。以下に、建設当初のフィレンツェとピサの植物園を例に再検討してみたい。

2. 16 世紀のフィレンツェ植物園とピサ植物園の構成

2.1. フィレンツェ植物園

フィレンツェ植物園は、ピサ植物園に次ぐトスカーナ公国内二番目の植物園として、メディチ家の当主コジモ一世の命で 1545 年に建設された。平面デザインは、メディチ家の数々のプライベートな庭園を手がけてきた建築家 N. トリーボロ(1500-58)が担当し、植物栽培の専門指導は L. ギーニ(1490-1556)を始めとするピサ大学植物学講座の教授陣が行った¹⁵⁾。サン・マルコ修道院の脇に位置する庭園の敷地は、およそ 130m 四方のややいびつな四角形をしており、建設当初の状態を示していると思われる最古の現存図面に

よれば、敷地全体は八本の園路で大きく分割され、中央には水路を巡らせた八角形の区画が設けられていた(図 1)。この中央八角形区画には噴水が設置され、G. ヴァザーリ(1511-74)によれば大理石製の水棲生物の彫刻が飾られていたという¹⁶⁾。

さてこのフィレンツェ植物園は、建設後 40 年ほど後に、コジモ一世の次男にあたる時のトスカーナ大公フェルディナンド一世(位;1587-1609)によって、拡張・再整備されることになった。当時のメディチ宮廷に出入りし、大公周辺の人々と親しく交わっていた修道士のリッチョは、このときの模様を著書『実験的農業論』の中で詳しく記述している。植物園の拡張整備が、非常に美しく秩序然と行われたことを賞賛した後で、リッチョは庭園区画の具体的な分割作業がおおよそ以下の手順で行われたとして紹介している。

「区画は八つに分割されてアルファベットの 8 文字、すなわち A,B,C,D,E,F,G,H の文字が割り当てられた。そして各文字の内部はというと、優雅な A の文字を冠した最初の区画には、内部の小区画の数に応じて、1 から順に数字が振られていった。こうして B 区画も同様に作ってゆき、割り振る数字はみな舗装レンガの上に小さく 1 から 800 まで刻んでいった。」¹⁷⁾

リッチョの記述から、1580 年代に行われたと推測されるこのフィレンツェ植物園の再整備作業においても、建設当初の全体を八分割する構成そのものは踏襲されたことがわかる。興味深いのは、その八つの大区画に八つのアルファベットが割り当てられ、さらに内部の小区画に数字が振られた点である。このような構成をとった理由を、リッチョは先の引用箇所が続いて次のように解説している。

「庭園を模して A,B,... の 8 文字と、各区画ごとの数字とで構成された小冊子が作成された。ここには外国種と国産種のあらゆる植物が記載されており、植物を取り出すのに支障がないようにしているのだ;さらにこうした秩序構成によって、フランドル出身のジュゼッペ・カサポーナ師がこの庭園に取り寄せる無数の薬草類を命名することが可能なのである。」¹⁸⁾

彼の記述を整理すれば、まず庭園区画にアルファベットと数字を割り振り、続いてそれと同じ構成の小冊子を作成して、栽培植物を記載することで、園内のどの花壇の何番目には何の植物が植えられているのかが、素早く検索できるシステムが構築されたということになろう(図 2)。

図 1. フィレンツェ植物園, Firenze, Museo Botanico dell'Univ. Bibl.: Chiarugi, 785-839, 出典: S. Ferri et al, *I Giardini dei Semplici e gli Orti Botanici della Toscana*, Perugia, 1993, p. 56

図 2. フィレンツェ植物園の検索システム(リッチョの記述より筆者作成)

引用箇所の中でリッチョも述べているように、これは年々増大する園内栽培品種の効率的な管理と命名作業の簡便化のために導入された、大変合理的な植物管理システムと理解できる。これと同様の、幾何形態・文字記号による花壇分割と小冊子を用いた植物検索システムは、ピサ、パドヴァ、ライデン（1587 年建設）といった同時代の他の植物園においても実践されていたことが確認されている¹⁹⁾。

1580 年代に行われたこの拡張整備作業によって、フィレンツェ植物園の八分割された区画の内部が、具体的にはどのようなパターンに細分されたのかについてリッチョは記述を残していない。この点に関しては、ほぼ同時代に移転作業が行われた、同じくトスカナ大公国内のピサ植物園について見ることで、ある程度の推測が可能である。再びリッチョに拠りつつ、次節でその点を検討してみる。

2.2. ピサ第三期植物園

ピサ植物園は 1543 年に、著名な植物学者 L. ギーニを初代園長に迎え、世界初の植物園として華々しいスタートを切った。しかし、その後ピサの都市計画ともからんだ様々な制約から都合二回の敷地移転を余儀なくされ、1592 年に、現在まで続く第三期植物園が市の中心部に建設された。この最後の移転を命じたのも、活動が停滞していたピサ植物園を活性化し、再び世界最先端の植物研究機関にしようと目論んだメディチ家の大公フェルディナンド一世である。大公の命を受けてこの移転作業を指揮したのが、先のリッチョの引用でも登場した、当時のフィレンツェ植物園長を勤めていたジュゼッペ・カサボーナ (?-1595) であった。リッチョはこう記している。

「大公フェルディナンド陛下は、前述のジュゼッペ・カサボーナ師を最も高貴で美しい古代都市ピサへと派遣し、あらゆる種の貴重な薬草や植物で満ちた、美しく優雅な庭園の造営に当たらせました。師は機敏に事を運び、今日見られるような姿に仕上げた。」²⁰⁾

リッチョはさらに、同園がカサボーナによって「非常に秩序然として入念な区画分割を施して作られた」ことを記しているものの²¹⁾、具体的な花壇形態や作業の詳細などには触れていない。

この点を補足してくれる資料が、ピサ植物園史を追った L. トンジョルジ・トマーズィ女史によって紹介されている。女史が着目しているのは、ピサ大学図書館に所蔵されている手稿資料 ms.464 である²²⁾。カサボーナがピサに派遣されたときに携えていったこの手稿群の図版部分には、花壇デザイン、迷路・植樹パターン、園芸作業員が描かれており（図 3）、テキスト部分にはピサ植物園における研究・教育プログラムが記されている。前節との関連で興味深い

のが、この図版の中にフィレンツェ植物園の平面図（図 4）が含まれている点である。図 1 の単純な花壇模様の図面とは異なり、ms.464 のデザインでは八つに分割された各区画ごとに、複雑な幾何学模様が描かれている。これはピサ植物園の移転作業を任された当時フィレンツェ植物園長であったカサボーナが、参照資料として利用すべく、自らが管理していたフィレンツェ植物園の状態を描き写させたものとは考えられないだろうか。この点に関しては、後でもう一度リッチョの理想庭園構想の記述から検証してみることにしたい。

一方で、ピサ植物園の移転作業用の花壇図面集とも言えるこの ms.464 資料全体からは、当時の植物園が抱えていた様々な問題が見えてくる。第三期植物園には、縦長の敷地に正方形の花壇が二列にわたり合計八つ設置されており、おそらく ms.464 に含まれる花壇パターンは、この八つの花壇のためのデザイン集と思われる。いずれのデザインも厳格な対称性を有し、放射幾何学構成のものが多く、セルリオ（1475-1554）を始めとする同時代の建築・園芸論文に掲載されていた一般庭園用の花壇デザインを、さらに精緻化したものとなっている（図 5）。これらの複雑な花壇デザインに植物研究とは別次元の、同時代の装飾的庭園にも通じる審美的要素が込められていたことは、十分に考え得る。実際、16 世紀に建設された他の植物園の多くにも、ピサと同様の、明らかに効率的空間利用の観点からは不必要と思われるまでに厳格な対称性や放射形状を固持したデザインが、数多く見られる²³⁾（図 6）。同時代の理想都市平面にもさかんに現れるこの種の放射幾何学形態に、コスモロジカルな象徴性が当時込められていたことは、良く知られている²⁴⁾。

また ms.464 に含まれる迷路パターン（図 7）も、同時代の装飾的庭園においては迷路が必須の要素であった点を考慮すると興味深い²⁵⁾。さらに一見何気なく描かれたかに見える園芸器具の図も、その配置パターンには花壇デザインに通じる強い審美性が見て取れる。壊された武器の上に誇らかに園芸器具が掲げられた一葉など、戦争の破壊行為にうち勝つ園芸の生産性を、象徴的に謳いあげたものだろう。その一方で ms.464 中の 59r・64r には花壇デザインの他に数字と植物名が記されており、これはリッチョが書き記したフィレンツェ植物園の植物検索システムに該当するものと考えられる。

16 世紀の植物学が、近代科学への決定的な一歩を踏み出しつつも、依然として占星術や微候理論などの、M. フーコーが指摘する“類推・照応”の世界観にとらわれていたことは、科学史においても共通認識となりつつある。ms.464 資料はそうした初期近代植物学に見られる両義性が、植物園平面にも反映していた例証である²⁶⁾。

図 3. ms.464 の図版, Pisa, Biblioteca Universitaria, ms.464, 出典: L. Tongiorgi Tomasi et al., *Giardino dei Semplici: L'Orto botanico di Pisa dal XVI al XX secolo*, Pisa, 1991, p. 117, 119-120.

図 4. ms.464 のフィレンツェ植物園 出典 *Ibid.*, p. 125.

図 5.セルリオの花壇 (I sette libri dell'architettura) 出典: L. Tongiorgi Tomasi (1983), p.8.

3. リッチョの理想庭園構想と植物園

3.1. 「花の庭園」とモデルとしてのフィレンツェ植物園

ドメニコ会の修道士アグスティーノ・デル・リッチョは、イタリア各地の著名な庭園を見学してまわり、また自らもフィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェッラ修道院で園芸活動を行った人物である。本稿で引用している『実験的農業論』(1595)の他にも、『理論的農業論』、『記憶術』、『鉱物誌』などの著作を残しているが、いずれも生前に出版されることはなく、現在もその大半が未刊である²⁷⁾。

そのリッチョが、各地で見聞した植物園や王侯の著名な庭園の観察成果と、自らの実践的園芸知識のすべてを投入して書き上げたのが『実験的農業論』である。その中の“王の庭園について”と題された章で彼は、王侯貴顕が世にあまねく名声を確保するために、ぜひとも造営しなくてはならない理想的庭園の構想を行っている。庭園史においては、リッチョが各所に差し挟む同時代の庭園に関する記述ばかりが、貴重な一次資料として各庭園の研究で重用される傾向にあるが、ここでは前章までに見た同時代の植物園との関連から、リッチョのこの理想庭園構想自体に着目してみたい。

リッチョの構想した庭園は、1. 庭園の中心に建つ豪華な宮殿およびその関連施設、2. 花の庭園、3. 果樹園、4. 迷路状の森林区画の四つのエレメントからなるが、ここで注目したいのが二番目の「花の庭園 (il giardino dei fiori)」である²⁸⁾。「芳香花を付ける植物が、大小を問わず全て集められている」(47r)とされるこの庭園の形態は、フィレンツェで 200 ブラッチャ (約 117m) 四方の正方形が望ましいとリッチョは言うが、これは 130m 四方のフィレンツェ植物園とほぼ同じ大きさである。この後、敷地条件や庭園を囲う生け垣付き外周路について規定したあと (47v~48r)、いよいよ花の庭園内部の構成方法についての記述が始まる。リッチョの理想庭園論には図版がまったく含まれていないため、彼の記述を丹念に追って想像してみるしかないが、手稿 48v の部分でリッチョが指示している庭園形態を簡潔にまとめると、およそ以下ようになる。

まず正方形の敷地全体を、八本の園路で八つの区画に分割する。敷地の中央部分には八角形の泉を設け、その中心にさらに島を設けて、跳ね橋で渡れるようにする。島には大理石製の巨大な動物彫刻や、鉢植えの様々な芳香花で美しく飾られた噴水を設置する。

リッチョはさらに装飾に関して事細かに指示しているが、要するに敷地全体を八分割する点を押さえておけばいいだろう。これに続いて八つの区画の内部に、それぞれ噴水や彫刻で装飾された泉を一つずつ設けるように指示し、この八つの区画をどのように分割するか

について、以下の興味深い記述をしている。

「各区画はアルファベットの文字に区分しなくてはならない：すなわち A, B, C, D, E, F, G, H である。最初の区画を A と名付ける。二番目は B とし、以下、他の区画にも文字を割り振ってゆく。ただし A 区画の内部はさらに細かく分割して、あるものは円形、あるものは楕円形、あるいは六角形、星形、ハートやマンドリンを象った形、その他様々な形態に区切る。」(49r)

先に引用した、フィレンツェ植物園をめぐる記述とほぼ同じ内容であることは、一目明瞭である。これに続けてリッチョは、A~H の各大区画に含まれる様々な形態の小区画に、白い大理石の小ブロックを添えて、そこに 1 から順に 300 までの番号を振ってゆく指示をしている。そうすべき理由を彼はこう述べる。

「こうしておき、後で庭園と同じ構成をした小冊子を目録として使えば、それぞれのアルファベットに含まれる全ての数字に、どんな植物が対応しているかを見つけることができるだろう。」(同)

リッチョ自身はこの「花の庭園」の参照モデルを明示していないのだが、以上の記述から、フィレンツェ植物園 (図 1) とその植物検索システム (図 2) を模倣したことは明らかであろう。ただしリッチョが植物の科学的分類のみを念頭において、記号と幾何学から成るこの種の構成を導入したかどうかは、疑問が残る。ここでリッチョが『記憶術』の著者でもある点は重要だ。F. イエイツが指摘するように、古代以来の場所とイメージを用いた記憶強化法たる記憶術は、16 世紀には神秘思想の影響を受けて魔術がらみの強い象徴性を持つにいたった。幾何学図形にアルファベットと数字を配置した図版が、記憶術的図像として、G. ブルーノ (1548-1600) の記憶術著作には掲載されている (図 7)²⁹⁾。同様の記憶術的含みを、リッチョのこの計画に認めることも可能なのではないだろうか。

一方リッチョがここで、八つのアルファベット区画内部に含まれる、さらに細かな小区画の形態について具体的に指示している点が注目される。フィレンツェ植物園の構成を明らかに模倣したのだとすれば、リッチョが挙げている様々な形態の花壇が、同時代に実際に存在したのではないかと、との推測がたつ。ここで再び、前章で取り上げた手稿資料 ms.464 に含まれるフィレンツェ植物園の平面図 (図 4) に注目してみたい。この図が同園の実状を写し取ったものかは不明であるが、リッチョの上記引用箇所にてでくる星形や、円形、楕円形、さらにはハート形らしき区画分割まで、この図には描かれている。少なくともフィレンツェ植物園が 16 世紀末のある時期、リッチョの理想庭園構想の着想源となるような、きわめて装飾性の高い複雑な花壇を有していた可能性は高い。

図 6-1. 16C のパドヴァ植物園。出典: A. Minelli, *L'Orto botanico di Padova, Venezia*, 1995, p. 32.

図 6-2. 17C 初頭のマントヴァ植物園。出典: L. Tongiorgi Tomasi, *op. cit.*, p. 14.

図 7. G. ブルーノの記憶術的図像。出典は註 29 参照。

図 8. 『チッタ・イデアール』中の宮殿と庭園図。出典は註 35 参照。

3.2. 16 世紀の植物園と同時代の装飾的庭園

ここでやや視点を変え、「植物園」という言葉の語義について考察を加えてみたい。今日イタリア語で植物園を指す言葉としては、giardino dei semplici (英: garden of simples) もしくは orto botanico (英: botanical garden) がある。庭園史家 C. ラッザーロによれば、植物学の専門領域を示す botanico なる単語が 1600 年以前に使われる例はめったになく、通常は植物園を指しては giardino dei semplici と言っていた³⁰⁾。semplici とは一般に薬草を意味する言葉である。

リッチョ自身は、フィレンツェ植物園の拡張作業を記述する際には確かに同園を指して giardino de' Semplici と言っている³¹⁾。しかし理想庭園構想の部分では、「ピサの大庭園 (il gran giardino di Pisa)」や「厩舎の庭園 (il giardino delle stalle)」という表現を用いている³²⁾。giardino dei semplici という呼称が植物園を指す語として定着するのは 16 世紀の末になってからのようであるが³³⁾、この semplici なる単語が 16~17 世紀にかけては、薬草のみか装飾用の花にも同様に用いられていた点を、庭園史家 G. マッソンが指摘している³⁴⁾。すなわち giardino dei semplici といった場合、それは植物園を指すと同時に、一般庭園の花々を栽培する区画をも意味していた。その例としてマッソンは 17 世紀の版画家 G. B. ファルダ (1640-78) が描いたローマの庭園図を挙げ、そこで花卉栽培区画に giardino dei semplici と記されていることに注意を促している。

メディチ家が建設した植物園とリッチョを巡る本稿の文脈においては、リッチョと同じく 16 世紀末にトスカナ大公のメディチ家の宮廷に出入りした、建築家ジョルジョ・ヴァザーリ・イル・ジョーヴァネ (1562-1625) の『理想都市』(1598) に着目してみたい。ヴァザーリは同書のなかで、君主が都市内に建設すべき慰安のための離宮を提案しているが、そこに添えられた図版には、リッチョの理想庭園構想を彷彿とさせる、宮殿とそれを取り囲む庭園の平面図が描かれている (図 8)³⁵⁾。宮殿の両脇には、まったく同一の放射幾何学パターンをもつ装飾過多な小庭園が設置され、それぞれ「花の小庭園 (Giardinetto per fiori)」、「semplici の小庭園 (Giardinetto per semplici)」とキャプションが付されている。これなども、マッソンの指摘を裏付けられるものと理解できよう。最初のうちは単に「庭園 (giardino)」とよばれていた植物園は、やがて giardino dei semplici という呼称を得るようになるが、その段階でもなお、同時代の一般庭園と名称上の区別は曖昧だったといえる。

このように名称の上からは、16 世紀当時の植物園と一般の装飾的庭園とは重なる部分があった。さらに形状や構成の面でも、両者には通底する部分が多かったのではないだろうか。フィレンツェ植物園の構成をほぼそのままコピーした「花の庭園」が、王侯の装飾的庭園の一角に何気なく挿入されているという点から、そのことが推測できる。栽培植物に関しても、リッチョは「花の庭園」用にアダムのリンゴ (pomo d'Adamo) やチューリップ (tulipani)、パイモ (corone imperiali)、中国のオレンジ (aranci della China) など、16 世紀になってヨーロッパに登場した品種を具体的にあげて勤めている。これらの新種は、同時代の植物園においても、植物学者によって熱心に蒐集栽培されていた品種であった³⁶⁾。ただし、リッチョは植物の植え方をいろいろと工夫することで、植物園との差異化を図っている。すなわち、フィレンツェ植物園のある小区画ではギリシャゴケが集められ、別の小区画ではチューリップやアネモネが栽

培されていた例をリッチョは取り上げ、花の性質を理解していないこのような植え方では、花期が過ぎた後ではいさかも美しくない」と非難した後で、「花の庭園」には代わりに次の方法を勧めている。

「そうする (訳注: フィレンツェ植物園のように植える事) のではなく、ハートや星、その他の優雅な形態を持つ小区画には辺り一面、常に花を咲かせる別の品種の植物を植えるべきであろう。」(49v)

これに続けてリッチョは、一年十二ヶ月の各月にどんな花が咲くかを論じた自著『実験的農業論』の“花の章”の参照を指示している (同)。つまり植物園では、花期に関係なく一小区画には一種のみを常時栽培しているが³⁷⁾、王の庭園では常に花を咲かせるように配慮すべしとの指示である。また「花の庭園」で栽培する植物は、庭師に命じて「優雅な手法でピラミッドの形や地球儀形、ドラゴン、星、壺、その他の幻想的な形に仕上げさせ」るようにも勧めている (50r)。このように植物を様々な形に仕上げる手法は、当時の装飾的庭園一般で相当流行したようで、あまりに複雑な形態を使用するのは不適切だとして、同時代の園芸専門書では非難さえされている³⁸⁾。

以上のように、リッチョが王のための理想庭園の一角に構想した「花の庭園」の構成は、同時代のフィレンツェ植物園をモデルに採用したものであった。リッチョは園芸・造園技術に通暁した専門家の立場から、このモデルにさらに審美性を高める様々な工夫を導入して、学術研究を主目的とはしない王侯の庭園の一部としても、違和感なく収まることができる独自の庭園を創出したと言えよう。

結. 黎明期の植物園が抱える多様な側面

ピサ植物園の花壇形態や迷路パターンが端的に示していたように、16 世紀中葉に誕生したばかりの「植物園」は、同時代の「装飾的庭園」との強い類似性を保っていた。semplici という単語の分析からも分かるように、両タイプの庭園を隔てる境界は、我々が考えるよりはずっと曖昧で、自由に相互浸透が可能であった。初期の植物園が植物学の専門研究のみではない、装飾性や象徴性といった側面を多分に有していたからこそ、リッチョは王侯用の理想庭園を構想するさいに、「植物園」を「花の庭園」のモデルとして選択し、それにごくわずかの修正を加えるだけで「装飾的庭園」に転用することが可能であったのだろう。合理的な植物検索システムを備えて近代的な植物分類体系の構築に邁進する一方で、豊かな装飾をまとい、おそらくは強い象徴性をも有していた初期植物園の様子を示す貴重な資料として、リッチョの理想庭園論は評価できる。

「花の庭園」はまた、同時代の王侯貴族の庭園において、珍奇な植物や観賞用の花々が熱心に蒐集されていたことを物語る証言でもある。ここから生じる“博物コレクション空間としての庭園”という問題に関しては、リッチョが構想した「花の庭園」以外のエレメントの分析も視野に入れつつ、稿を改めて取り組むこととしたい。

1) ともに「驚異の部屋」の意味。この他 Cabinets of curiosities (好奇の部屋)、Kunstkammer (芸術の部屋) などの呼称がある。いずれも比較的小規模の室内に、床・壁・天井にわたって珍奇なオブジェが立錫の余地無く蒐集展示されていた。K. ボミアンによれば、16~17 世紀のヨーロッパにこの種の蒐集室が数百という規模で存在したという。K. ボミアン『コレクション: 趣味と好奇の歴史人類学』吉田城・吉田典子訳、平凡社 1992、p.75-76。16 世紀の蒐集流行に関する基本的な研究には以下のものがある。A. Lugli, *Naturalia et mirabilia: Il collezionismo enciclopedico nelle wunderkammer d'Europa*, Milano, 1983., O. Impey & A. MacGregor (eds), *The Origins of Museums: the cabinet of curiosities in 16C & 17C Europe*, Oxford, 1985., J. Kenseth (ed), *The Age of the Marvelous*, New Hampshire, 1991. 特に pp. 81-102.,

- G. Olmi, *L'inventario del mondo: catalogazione della natura e luoghi del sapere nella prima età moderna*, Bologna, 1992., P. Findlen, *Possessing Nature: museums, collecting, and scientific culture in early modern Italy*, Berkeley, 1994., L. Basso Peressut(a cura di), *Stanza della meraviglia: I musei della natura tra storia e progetto*, Bologna, 1997. 特に pp. 3-134. また 1989 年からは蒐集史専門の紀要 *Journal of the History of Collections* が刊行されている。
- 2) この点に関しては拙稿『16 世紀イタリアにおける庭園とコレクションについて: メディチ家の事例を中心に』(1998 年度東京大学修士論文) 参照。
 - 3) 本稿では「装飾的庭園」という言葉を、庭園史一般で用いられる pleasure garden の訳語として用いる。科学研究を目的としない、一般的庭園の意。
 - 4) Agostino del Riccio, *Agricoltura Sperimentale*: Biblioteca Nazionale Centrale, Firenze, ms, Targioni Tozzetti 56, vol. I-III. このうち vol. III 内の“王の庭園について”の章は、“Agostino del Riccio, Del Giardino di un Re, a cura di Detlef Heikamp”として G. Ragionieri (a cura di), *Il Giardino Storico Italiano: Problemi di Indagine Fonti Letterarie e Storiche*, Firenze, 1978, pp.65-123. に収録されている。また本稿で vol. I からの引用を行う際は、以下の文献に部分的に引用されているものを参照したことをお断りしておく。L. Tongiorgi Tomasi, F. Garbari, *Il Giardiniere del Granduca: storia e immagini del Codice Casabona*, Pisa, 1995, p.31., F. Garbari, L. Tongiorgi Tomasi e A. Tosi (a cura di), *Giardino dei Semplici: L'Orto botanico di Pisa dal XVI al XX secolo*, Pisa, 1991., pp.278-282. リッチョの他の著作に関しては註 27 参照。
 - 5) 中世の修道院に設けられた菜園では、薬草や食用植物が蒐集栽培されていたことは良く知られている。またイベリア半島のトレドやセヴィリアには、イスラム王朝のもとで植物研究を目的とした庭園が 11 世紀に建設されている。J. Harvey, *Medieval Gardens*, London, 1981, p.40.
 - 6) 以下の記述は次の文献に大幅に依拠した。S. Aran, *Cognitive foundations of natural history*, Cambridge, 1990, pp. 128-139., K. M. Reeds, *Botany in Medieval and Renaissance Universities*, New York&London, 1991, pp. 3-38., E. B. MacDougall, “A Paradise of Plants: Exotica, Rarities, and Botanical Fantasies”, in J. Kenseth, *op. cit.*, pp. 145-158., P. Findlen, *op. cit.*, pp. 243-270.
 - 7) テオフラストゥス (前 372 頃-前 288 頃)『植物原因論』、プリニウス (23-79)『博物誌』、ディオスコリデス (1 世紀頃)『薬物誌』、ガレノス (130 頃-200 頃)の医学著作など。校訂作業については K. M. Reeds, *op. cit.*, pp. 17-22., V. Nutton, “Greek Science in 16C Renaissance”, in J. V. Field & F. A. J. L. James (eds), *Renaissance and Revolution*, New York, 1993, pp.15-28. 参照。
 - 8) K. M. Reeds, *op. cit.*, pp.15-38.
 - 9) 16～17 世紀に、過去 2000 年間に知られていた種の約 20 倍の新種植物がヨーロッパに流入したと考えられている。また 16 世紀初頭では 600 種程度が植物学者の間で認知されていたが、同世紀後半には 1760 種が同定可能となったとするデータもある。C. Lazzaro, *The Italian Renaissance Garden*, New Heaven & London, 1990, pp.11-12., L. Zangheri, “Curiosities and Marvels of the 16C Garden”, in M. Mosser and G. Tyssot (eds), *The History of Garden Design*, London, 1991, pp. 64-67. この時期ヨーロッパに紹介された代表的な種にはトウモロコシ、ジャガイモ、トマト、ココア、コーヒー等がある。
 - 10) O. ブルンフェルス『植物生態図』(1536-39)、L. フックス『草木誌』(1542)、H. ボック『植物書』(1546) など。特にデューラー工房出身の H. ワイデッツが挿し絵を付したブルンフェルスの著作は、植物図譜の革新に大きく貢献した。K. M. Reeds, *op. cit.*, pp.33-36., G. Olmi, *op. cit.*, pp. 122-134.
 - 11) ローマ (1513)、バドヴァ (1533)、ボローニャ (1537)、フェラーラ (1543)。P. Findlen, “Courting Nature”, in N. Jardine, J. A. Secord and E. C. Spary (eds) *Cultures of Natural History*, Cambridge, 1996, pp.57-74. 特に p. 59.
 - 12) 植物園史研究は、庭園史や科学史においても近年緒についたばかりである。イタリア植物園史に関する基本文献は以下がある。M. Azzi Visentini, *L'Orto botanico di Padova e il giardino Rinascimento*, Milano, 1984.F. Garbari, L. Tongiorgi Tomasi e A. Tosi (a cura di), *op. cit.* (註 4), S. Ferri e F. Vannoizzi (a cura di), *I Giardini dei Semplici e gli Orti Botanici della Toscana*, Perugia, 1993., A. Minelli, *L'Orto Botanico di Padova, 1545-1995*, Venezia, 1995.
 - 13) 四角形を四分割するタイプの庭園を一般にチャハル・バークといい、中世では修道院や王侯の庭園にさかんに用いられた。ペルシャ起源の非常に古い形式とされる。植物園では四区画が四大陸を表象する例が多い。
 - 14) J. ブルクハルトは、ルネサンスの王侯が蒐集家的興味から庭園で珍獣奇鳥・珍花奇葉のコレクションを行っていた点を指摘する一方で、植物園では実用目的がもたらした優先点として両タイプの庭園をはっきり区別している。『世界の名著 45 ブルクハルト: イタリア・ルネサンスの文化』柴田治三郎訳、中央公論社、1966, pp.335-336. また C. サッカーも植物園は誕生当時から審美性よりも機能性を重視したと主張している。C. Thacker, *The History of Gardens*, London, 1979, pp.126-129.
 - 15) フィレンツェ植物園史は、A. Rinaldi, “La costruzione di una cittadella del sapere: l'orto botanico di Firenze”, in M. Fagiolo (a cura di), *La città effimera e l'universo artificiale del giardino*, Roma, 1980, pp. 193-202., G. Cellai Ciuffei & F. Fabbri, *Guide to the “Giardino dei Semplici”*, Firenze, 1993, pp.3-8. を参照。
 - 16) G. Vasari, *Le vite dei più eccellenti pittori, scultori ed architettori* [Firenze 1568]; ed. a cura di G. Milanese, Milano, 1906, VII, p. 636.
 - 17) A. Del Riccio, *op. cit.*, vol. I, c. 75v.
 - 18) *Ibid.*
 - 19) L. Tongiorgi Tomasi, “Geometric Schemes for Plant Beds and Gardens: A Contribution to the History of the Garden in the 16C and 17C” in I. Lavin (ed), *World Art: Themes of Unity in Diversity (vol I)*, London, 1989, pp. 211-217.
 - 20) A. Del Riccio., *op. cit.*, vol. I, c. 75r. G. カサポーナなる人物はフランドル出身で、メディチ家の宮廷植物学者としてフィレンツェ植物園長 (1583-1592)、ピサ植物園長 (1592-96) を歴任した。長らく経歴が不明の人物であったが、1992 年に新資料が発見され、詳細が知られるようになった。16 世紀当時は相当著名な学者であつたらしく、ヨーロッパ中の植物園長や博物学者と文通し、博物標本や植物の交換を行っている。新資料に基づく最新の伝記は L. Tongiorgi Tomasi e F. Garbari, *op. cit.* (註 4) を参照。
 - 21) A. Del Riccio, *op. cit.* vol. I, c. 75r.
 - 22) Pisa, Biblioteca Universitaria, ms. 464. この資料の分析に関しては、L. Tongiorgi Tomasi 女史の以下の研究に大幅に依拠した。L. Tongiorgi Tomasi, “Projects for Botanical and Other Gardens: a 16th-Century Manual”, in *Journal of Garden History*, 1983, vol. 3, pp.1-34., “Arte e Natura nel Giardino dei Semplici: dalle origini alla fine dell'età medicea”, in F. Garbari, L. Tongiorgi Tomasi e A. Tosi (a cura di), *op. cit.* (註 4), pp.115-212. 特に pp. 122-126.
 - 23) 複雑なパターンの花壇が見られるのはおおむね 17C までで、次第に方形の単純な形態へと収斂してゆく過程が、ほぼ全ての植物園において見られる。L. Tongiorgi Tomasi, *op. cit.* (1983), pp. 23-25.
 - 24) 植物園とルネサンス理想都市平面図との比較に関しては以下を参照。M. Azzi Visentini, *op. cit.*, pp.69-104., A. Rinaldi, *op. cit.*, pp. 198-199.
 - 25) ヴィラ・デステ、ヴィラ・ランテ、プラトリノーなど、16 世紀を代表する大庭園にはいずれも迷路が設置されている。16 世紀の装飾的庭園における迷路の流行に関しては、P. Carpeggiani, “Labyrinths in the Garden of the Renaissance”, in M. Mosser and G. Tyssot, *op. cit.*, pp. 84-87., G&S. Jellicoe, P. Goode, M. Lancaster (eds), *Oxford Companion to Gardens*, pp. 360-361. また興味深いことに、バドヴァ植物園においても、実現こそしなかったが建設当初は迷路の設置が検討されていた。M. Azzi Visentini, *op. cit.*, p. 35.
 - 26) M. フーコー『言葉と物』渡辺一民・佐々木明訳、新潮社 1974, pp. 44-45.
 - 27) 『実験的農業論』に関しては註 4 参照。各月ごとの園芸家の作業について論じた『理論的農業論』は『実験的農業論』vol. III に続いてまとめられている(BNCF, ms, Targioni Tozzetti 56)。『鉱物誌』は A. Del Riccio, *Istoria delle pietre*, a cura di P. Barocchi, Firenze, 1979 として出版されている。『記憶術』A. Del Riccio, *Arte della memoria*, BNCF, Magl. II, I, 13 については現在まで未刊。またリッチョの伝記は、D. Heikamp, “Introduzione”, in G. Ragionieri, *op. cit.*, pp.59-64., P. Barocchi (a cura di), *Scritti d'arte del Cinquecento*, Milano-Napoli, 1977, vol.II, pp.2370-2371. 参照。
 - 28) A. Del Riccio, *op. cit.*, vol. III, c. 47r-51r. 以下、「花の庭園」部分からの参照・引用に関しては、本文中に該当する手稿番号を記しておく。
 - 29) F. イエイツ『記憶術』青木信義 [他] 訳、水声社、1993。G. Bruno, *Le Ombre delle Idee: Il canto di Circe, Il sigillo dei sigilli*, a cura di N. Tirinnanzi, Milano, 1997. 本文中に掲載した図 7 は、ブルーノ同書の p.223 より。
 - 30) C. Lazzaro, *op. cit.*, p.12.
 - 31) A. Del Riccio, *op. cit.*, vol. I, c. 75v.
 - 32) *Ibid.*, vol. III, c. 49v-50v. リッチョがフィレンツェ植物園を指して「厩舎 (stalle) の庭園」と言っているのは、当時フィレンツェ植物園の隣に、メディチ宮廷専用の厩舎があったためである。
 - 33) ピサ植物園初代園長 L. ギーニが同園に言及した書簡 (1545) や、フィレンツェ薬局方 (1567) に登場するフィレンツェ植物園への言及箇所では、単に「ピサの庭園 (il giardino di Pisa)」や「フィレンツェの菜園 (orto di Firenze)」と呼ばれている。ギーニの書簡は“*Il Giardino dei Semplici nelle fonti antiche*”, in F. Garbari, L. Tongiorgi Tomasi e A. Tosi (a cura di), *op. cit.*, p.277. 薬局方については Firenze e la Toscana dei Medici nell'Europa del Cinquecento, *La corte, il mare, i mercanti; La rinascita della scienza; Editoria e Società Astrologia, magia e alchimia*, Milano-Firenze, 1980, p.197. を各々参照。
 - 34) G. Masson, “Italian Flower Collectors' Gardens in Seventeenth Century Italy”, in D. R. Coffin(ed), *The Italian Garden*, Washington D. C., 1972, pp. 61-80. 特に semplici の語義に関する考察については、p. 67 を参照。
 - 35) G. Vasari il Giovane, *La città ideale: Pianta di Chiese (palazzi e ville) di Toscana e d'Italia* [Firenze 1597]; a cura di Virginia Stefanelli, Roma, 1970, pp. 108-109.
 - 36) A. Del Riccio, *op. cit.*, vol. III, 48v, 49v, 50r, 50v. アダムのリングとは、当時ポルトガルからイタリアへ輸入された柑橘類の一種で、著名なイタリア人植物学者 P. A. マッティオリ (1501-78) も自著でこの種に言及している。C. Lazzaro, *op. cit.*, p.11 参照。またリッチョは同箇所ではチューリップを含めた球根種を、高価ではあるがぜひとも入手栽培する旨指示している。次世紀オランダのチューリップ狂時代を予見するようで、興味深い。
 - 37) 16C 後半のバドヴァ植物園でも同一種は一小区画にまとめられたが、教育や標本採取の便から複数区画が同一種に充てられた。A. Ubrizsy Savoia, “L'Orto di Padova all'Epoca del Guilandino”, in A. Minelli, *op. cit.*, pp.180-181.
 - 38) 園芸家 G. B. フェラーリ (1584-1655) は自著 *Flora ovvero la Cultura di fiori* (Roma 1638) で、複雑過ぎる花壇形態は種蒔・栽培の点で不適切と難じている (p. 16)。*cit.* in J. D. Hunt, *Garden and Grove*, Philadelphia, 1996, p.75.

(2000 年 5 月 10 日原稿受理, 2000 年 7 月 4 日採用決定)